

2021.1.29 第4回 研究会 NEWS LETTER

国際教養学部 言語文化学科



～ 紙上質疑 ～

発表者：浅山佳郎

今回は、対談というわけにいかなかったのですが、会の席上ご発言いただいた方々に、ご意見ご感想の原稿をいただき、発表者の要旨とあわせて、紙上での「質疑（「応答」まではいきませんが）」としました。

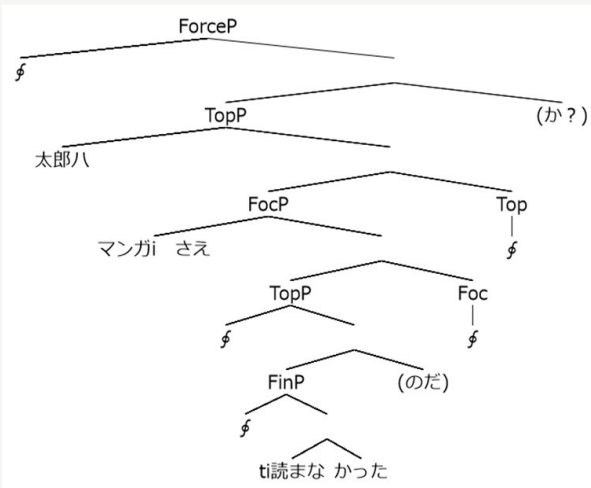
<発表要旨>

RizziのCP階層におけるFocPの主要部として、機能的な範疇要素の「FOC」を想定する。ここに音形として存在するのが「サエ」とあるというのが本発表の主張である。この位置にある「サエ」がそのまま実現すると、下の(1)が成立する。

(1) [TopP太郎は[FocP[TopP[FinP[TPマンガを読まなか]った]ので]さえ]ある]
「サエ」は陳述を終了させる形式に後続できない、あるいは「サエ」には陳述機能がな
いという制約を与えれば、

(2) のだ+さえ→のでさえ+ある
のように、本来「ノダ」に後置されるべき「サエ」は、その内部に割り込むことになる。

もしこの「サエ=FOC」がモダリティ要素に付属しない場合、そのままのハダカの状態
では存在できないので、次の段階として焦点対象をTP内部に探索することになる。



発表時の資料から

探索対象が名詞句である場合、「サエ」は、それに添加して、「サエ句」全体を左殻の「Foc」位置に移動する。以下の(3)である。

(3) [TopP太郎は[FocPマンガiさえ[FinP[TPti読まなか]った]FOC]TOP]

左殻への移動は、右殻にあるFoc主要部位置から離れた「サエ」が、左殻のFocのSpec位置に定位されなければ、その特性を維持できないから起こると考えられる。

「サエ」の探索は、名詞句の他に、別の構成要素としての残余の述語動詞を対象とすることもできる。以下の(4)である。

(4) [TopP太郎は[FocPマンガを読みiさえ[FinP[TP[uPti]しなか]った]FOC]TOP]

この場合「サエ」は、否定辞（とそれと不可分の時制辞）を残して残余のuP全体を左殻のFoc位置に移動させる。

最後にCP階層にあることについて。「サエ」が、TP内部の名詞句に付属する場合、

(5) [[TP太郎が激辛麺を食べない][CPさえ]]

であれば、「太郎」と「激辛麺」の2つの可能性があることになる。一般的に移動は、素性の一致によって行われるが、「太郎」と「激辛麺」のどちらにその素性があるかは、形態論及び統語論的なレベルでは決定されない。よって、最適対象を選択するために、主要部「サエ」は、文脈上にその素性を探索することになる。

<安間先生>

「サエ」を題材として補文 (CP) の階層構造を検証したことは言語学的に興味深いと共に日本語教育の実践場面でも有益であると感じた。サエの結合に制約があり他の副助詞より使いにくいことは直感的に理解できる。これを CP の構造上の制約に還元した点は見事である。今後、この制約を一般化するために、同様の動作を取る他の副助詞との比較対照があればなお説得力が高まるであろう。

結合の制約という点では、サエのみに要因を帰属させるのではなく、結合相手の文法的素性も考慮する必要があるのではないか？例えば「サエは名詞的属性を持つ構成素と結合可能である」と仮定し、当該構成素（特に文）にその属性を付与することも想定可能である。例えば副詞や接続詞には存在しないがある種の文はこの名詞フェロモンを出し、サエがそれに誘引されると考えると説明が少し合理化されるように思われる。もちろん純然たる名詞あるいはコト名詞句は最もフェロモン濃度が高いので容易に結合できるが、～シ（サエ）という動詞連用形も一般的な動詞→名詞の派生（例：「読む」→「読み」）に準じて名詞的属性の存在を許容できる。尤も「叶える」には名詞派生形はないが「叶えサエする」のように結合できるので名詞属性の対象範囲を拡張する必要がある。「叶える」の場合、サエの後にスルが来るので「叶えサエ」の句を名詞と認定することは可能であろう（しかしながらこのことを以て「叶え」が名詞的属性であることの根拠にはならない）。

一般的に、補文は適切な補文化詞を伴えば表面的には名詞句と相似になる。ドイツ語の *dass*、フランス語の *que* は何れも主語になるほか他動詞の目的語にもなり得る。その中身が接続法を用いて *non-finite* であることを表すことがあることも名詞的属性が高いことの傍証である。英語では同様の事象を *to* 不定詞で表すことが多く（例： *I want to be a professor*），他動詞との結合では伝統文法においては直接目的語という認定を受ける。ここに含まれる *agent - action/state* のいわばジャンクション的關係 (*I be a professor*) は事実性に関して中立な *non-finite* 構造である。

一方、「～ヲサエ」や「～ニサエ」のような格助詞との併用については「～サエ」が結合した後で格付与をするために格助詞が後から無理矢理入り込んだとしてもよいかもしれない。動詞との格関係が弱い「～ノサエ」は非文なのではないか？この辺りは未論考。

「～サエ」句の文頭移動はそこに焦点を当てるための談話的なもので、統語制約とは切り離して考えた方がよいかも知れない。これが起こるのは「～」部分が主語・目的語・斜格要素など移動可能なものに限られる。

なお老婆心ながら、*finiteness* は「フィットネス」ではなく「ファイナイトネス」です。（浅；あせっ☺）

<野原先生>

教えることと結びつけながら興味深く拝聴しました。「だけ」と「さえ」と「すら」は何が違うかという質問は、中上級レベルの学習者からよく出ます。日本語教育では一般的に、これらの副助詞の意味と用法は文法として学びます。まず、初級の早い段階で「だけ」（くだものだけ食べました／男の子が一人だけいます）を学び、中級になって「～さえ～」（ひらがなさえ書けない／温厚なあの人でさえ怒った）、「～さえ～ば～」（薬を飲みさえすればよくなります／暇さえあればアニメを見ます）を学びます。「すら」はそのあとです。

この提出順序は、ご発表のなかの「中納言」の結果（「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」での検索結果）で出現頻度の多い順とも同じです。また、出現位置について、「だけ」はそれほど多様な位置に出現はせず、一方、「さえ」と「すら」は統語上、多様な高さに出現するという考察も、提出順となる難易の順序の根拠であるとも考えられ、大変面白いと思いました。

教える際の導入部分では、これらの言葉が使われる場面や状況と一緒に提示しますが、類義の言葉をすでに学習している場合は、それらとの決定的な違いを説明します。この決定的な違いは、言語形式であったり、書き手、話し手の心理状態であったりと、いくつか側面があります。今回のご発表では、言語形式からの説明ができ、教育の現場に貢献できるのではないかと思います。例えば、格マーカの語順として、「ヲ～」「～ヲ」の比較をご紹介いただきましたが、「～ヲ」では「さえ」も「すら」もほぼ出現がないようなので、「だけ」との決定的な違いとして示すことができます。一方で、対格付与以後に付与される「さえ」「すら」が出現総数の1～2%あったとのことですが、これを「だけ」との決定的な違いとして示すのは学習者にとっては混乱のもとになるかもしれません。個人的にはこの1～2%の中身を分析してみたいです。



論者が在外赴任したエストニアのビールのラベル

最後に、分析にコーパスを取り入れられていたのは、バランスの良い方法だと思いました。よい学びの時間となりました。ありがとうございました。

<二宮先生>

サエがCP階層にあることとダケが名詞句内にあることは例えば、以下のような省略文の受容度からも妥当ではないかと考える。A)は問題なく受容可能であるが、B)は全く不可能ではないとしても A)に比べると受容度は下がるだろう。

- A) 「どれが欲しい？いくつでもいいよ」「これダケ」
B) 「彼女は何も食べないの？」「これサエ」

省略を現在の理論で具体的にどのように分析するのかを承知しない（省略と並列が以前からの問題であったが）ため、分析によっては以上の2例をダケとサエの樹上図上の問題に帰すことができない場合もあるだろうが、ダケが後の動詞句の省略を可能にするのは当該の助詞がDP内部あるいはその付近にあるからであり、サエはそこにはなく別の場所にあると考えることができる。例えば動詞句内にあり、それが省略されると、DPにアフェクトできないと考えることもできよう。

日本語はサエ、ダケは伝統的に（副）助詞であるから以上のような議論がまず生じるのは首肯の限りだが、英語やスペイン語を見ると、同様な要素が、サエ＝副詞（英語:even, スペイン語:incluso, aun）、ダケ＝形容詞または副詞（英語:only, スペイン語:solo）、と伝統的に現れるのも興味深い。副詞は英西語ではもっぱら名詞句以外の要素を修飾する。例えば、前置詞句、動詞句、副詞句、形容詞句、文修飾などである。ダケ(solo)は形容詞でもありうるので名詞句も修飾する。通言語的に考えても、ダケは名詞句内にも存在できるし（おそらくオールマイティーなのでしょう）、サエは恐らく名詞句内にはないであろう、と考えることができる。

また語彙意味的には、発表の最初にもあったようにサエの意味機能が「極相（極値）(extremes)」であり、ダケのそれが「制限（restriction）」であることにももちろん関連があるのだろう。極相を表現するためには、コンテクストを含めたベクトルが必要であるが、名詞句だけではそれを表すのは難しい。制限は名詞句のみでも容易に指定できる。

以上、印象的な感想ですが、浅山先生の発表を聞いて考えたことです。

今後の研究会の予定

2020年度

第5回研究会 3月18日（木曜）13:35～14:35 発表予定者 堀川宏

2021年度春学期

第6回研究会 5月26日（水曜）15:30～16:30 発表予定者 佐藤勤治

第7回研究会 6月30日（水曜）15:30～16:30 発表予定者 齋藤哲